

## 相沢 育哉 (Aizawa Ikuya)

2020~2021年度奨学生

オックスフォード大学 教育学部 博士課程

オックスフォード大学の教育学部の博士課程に所属する、相沢育哉です。財団の皆さまからは、実りの多い留学生活を送ることができるようにと日頃より大変心温まるお言葉を頂いております。この場をお借りして深く感謝申し上げます。博士課程の研究も大詰めを迎えましたので、この報告書では私の研究分野である「英語教育」と自らの英国での留学経験を踏まえて、外国語である英語を使用して学位を取得する意義や課題について執筆させていただきます。坂口財団は日本で学ぶ外国籍の留学生のご支援もされていますので、日本語を外国語として学び、日本の大学でそれぞれの学術分野でご活躍されている留学生の方々のご経験とも共通する点があるかもしれません。

英語学習者の数が2020年には世界の人口の20%にあたる15億人と言われ、英語学習の重要性がますます高まっています。国際共通語として英語を使えることが当たり前になりつつある昨今、英語教育(第二言語習得)を専門に扱う研究者の関心も効率よく「英語を教える」ための教授方法から「英語で教える」ための教授方法を提言することに移行しています。特に、この流れは、バイリンガル教育や早期英語教育が根強く支持されている北欧諸国の言語政策に後押しされていると考えられています。

私は英語を学校の科目として日本の小学校、中学校と高校で学びました。大学に入学するまでは英語圏への留学の経験はありませんでしたので、大学入学時の英語能力は英語検定2級にぎりぎり合格する程度だったと思います。英語が好きだったので、大学に入学すると、無謀にも一年生の一学期に英語開講の授業を履修し、生まれ

て初めて英語を用いて学術分野を学ぶ経験をしました。授業の内容が難しかったことに加えて英語で授業に参加し、ディスカッションを行い、課題を提出し、期末試験を受けることが二重苦だったことを今でも鮮明に覚えています。振り返ると日本語であっても困難な授業を英語で履修する決断は無謀でした。その後、学部時代は英語開講の授業を多く履修したり、留学生と積極的に話したり、懸命に英語力の向上に励みました。

現在オックスフォード大学では英語を通して研究を行い、授業に参加し、自らもチューターとして修士課程の授業を担当しています。英国で学位を始めた当初は原稿の下書きを日本語で作成したり日本語に頼ったりすることもありましたが、いつの間にか英語で学問を行うことがデフォルトになりました。ただ、英語開講の授業を学部生で履修してからこの10年間英語を使用して専門分野の研究を行なってきましたが、今でも英語で学位を取得することの非効率性を払拭することはできません。一番大切なのは「内容」であって、「表現」は二の次だという声もよく耳にします。ただ、私個人の経験では「表現」のせいで思うような評価を得られないことも多々ありました。高等教育機関で学位を取得するにあたって、表現豊かな文章で論点を伝えることは重要な能力だと日々身を以て感じます。大学の課題や学位論文は匿名で採点されますし、英語母語話者と非母語話者は同じ土俵で評価されます。表現や言葉尻を変更するだけで、論文の査読者から高評価を頂ける経験も過去に多々ありました。学術面に限らず、日常生活でも英語の言い回しのせいで悔しい思いをすることは日常茶飯事です。自然科学、社会科学、人文科学と言語の重要性は異なってきますので、自然科学を専攻する場合は他の分

野と比較して、言語を分析する能力(metalinguistic knowledge)は必要ないと論じる専門家もいるかもしれません。ただ、学問分野にかかわらず、研究結果を正確に伝えるためには高い分析能力と言語能力が必要になります。

このように、外国語を媒介して学習を行うと理解度や定着度に弊害が多々生じる可能性があるにもかかわらず、世界中の多くの教育機関が英語開講の授業を取り入れて、英語を用いて学位を取得する留学を推奨しています。高等教育では高度な言語能力が求められるので外国語ではなく、母語で教育を受けるべきだと唱える専門家もいるかもしれません。ただ、多くの学生にとって、英語で学術分野を勉強する経験は国際社会への一歩を踏み出すことにつながります。いわゆるソフトスキル(コミュニケーション能力、批判的思考能力)を英語で養う経験も国際社会で活躍するためには必要不可欠です。こういった英語で学ぶからこそ得ることができる利点を秤に掛けると、少しの位の学習の弊害は問題にはならないかも

しません。ただ、このような哲学的な問い合わせに応えるには、多くの実証研究を通して利点と欠点の両方を明らかにしていく必要があります。特に外国語で学ぶ場合に、どの程度の学習の喪失が許容範囲なのか(英語能力が向上すればそれでいいという意見もあるかもしれません)、日本語と英語で勉強した際の学習の差異があるのか(英語開講の学位を卒業した場合だと能力や理解度に差があるのでしょうか)等の問い合わせに応えていく必要があります。

最後に、坂口財団の皆さんをはじめ、私の研究を応援してくださっている方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。英国で研究を続けることができるのも、私のことを様々な形で支援してくださっている方々のおかげです。その方々に恩返しをすることができるよう、今後も研究活動に精一杯従事していきたいです。温かく応援してくださっている方々に心から感謝しつつ、この報告書を締め括らせて頂きたいと思います。

以上



▲オックスフォード大学教育学部と猫